

奈良女大家政 ○辻井康子 大阪成蹊女短大 吉村祥子

目的 衣料害虫が毛製品を選択して食害するのは、毛に含まれる成分の刺激に対する反応として起る。この刺激成分は誘引物質であり、才34回年次大会で報告したとおり、羊毛をエーテルで抽出した液に誘引性が認められ、その成分は多くの脂肪酸および脂肪酸エステルその他を含有していることが推定された。しかしエーテルで抽出したあとの羊毛にお誘引性がみられたことから、さらに抽出溶媒をかえて誘引成分の抽出を行ない、イガ幼虫を用いて誘引行動を検討し、誘引成分の検索を試みた。

方法 供試昆虫はイガ (*Tineea pellionella* (L.)) の幼虫を用いた。羊毛の抽出にはヘキサンを用い時間を変えて抽出し、抽出液はTLCで分析した。TLCにより分離された抽出物について、イガ幼虫を用いて、シャーレ法、ボックス法による生物検定を行ない、誘引性の検討を行なった。誘引性がみられた分離成分についてさらに、GLCの分析を行なった。

結果 1)羊毛をヘキサンで24時間以上抽出すると、羊毛の誘引成分はほとんど抽出され抽出後の羊毛への誘引率は3%であった。2)抽出液はTLCにより11個の分離成分が得られたが、それらについて誘引性の生物検定を行なったところ、誘引率が80%以上認められたのは4個であった。3)誘引性を示したTLCによる分離成分4個について、GLCにより分析したところ、多数の脂肪酸および脂肪酸エステルの含有がみられ、誘引成分中には、カプリル酸、ラウリン酸、パルミチン酸が共通に含まれていることが認められた。しかし、他にも多くの未確認物質が認められた。